

毘沙門沢右俣 1990年11月3日

消水平のやや北方、主稜線と中の大倉尾根の分岐点よりやや南に下がった所から毘沙門沢右俣めざして下降開始。毘沙門沢右俣の源頭部は、一面のササ原である。ただササの背丈は低く、膝から腰までほどしかない。ササ原のほぼ中央に、雨が降った後などに水の流れ道になると思われる細いミゾがあるが、今は全く流れていない。20分程ササ原を下降すると、ガレ場にいきつく。毘沙門沢右俣の水源はこのガレ場の中腹からの湧水で、数カ所からの湧水が集まって、立派な沢の流れを作っていた。

10:35いよいよ沢の流れにそった下降に移る。すぐ4mの滝が出てきた。ガレ場にかかる滝で、岩はもろいが、流れている部分だけはしっかりしている。ホールドは充分で、一部流水の飛沫を浴びながらクライミングダウンする。

幸先はよかったのだが、このあと沢は平凡となり、左俣との合流点まで4カ所に小滝をかけただけで終わってしまった。左俣出合11:45。()

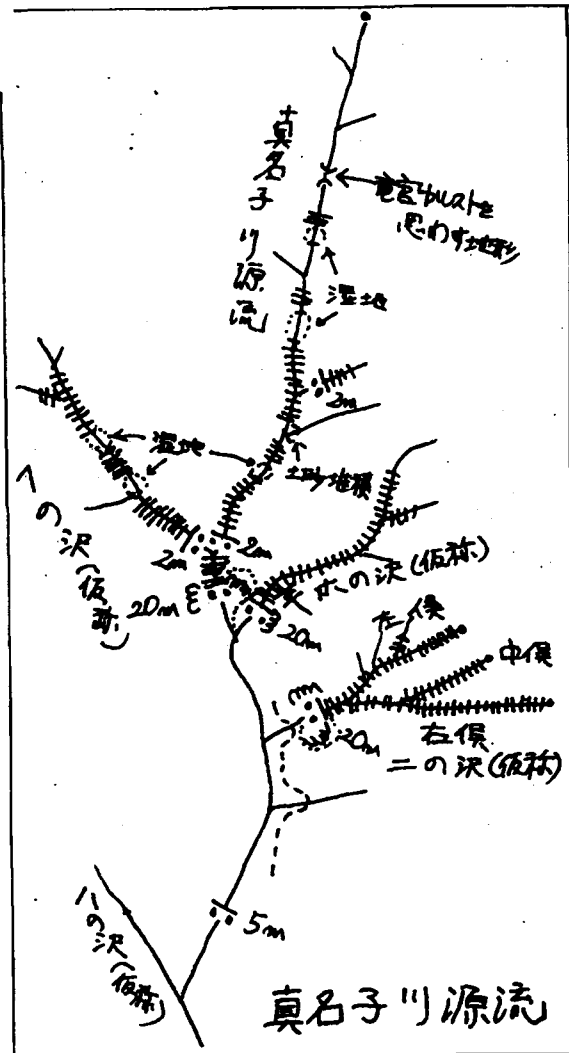
[タイム] 右俣下降開始(10:15)→右俣水源(10:35)→左俣出合(11:45)

真名子川流域の沢

真名子川は、羽鳥湖東南の稜線に源をもち、流れ下って阿武隈川に注ぐ。ここらあたりの沢は多くの人に登られていると思うが、遡行記録として整理されたものは今だ目にすることがない。

真名子川本流 1990年10月21日

真名子川林道は、ハの沢(仮称)にそって地図にあるより少し先まで入り込んでいる。終点のすぐ手前、ちょうど本流とハの沢(仮称)の合流点近くで沢に降り遡行開始。今日は真名子川の源流帯を構成する支沢群を、本流と共にできるだけ多



く遊行するつもりである。紅葉の始まりかけた樹林帯の中を5分程遊ると最初の滝が出てきた。5m ナメ滝。何本もの白糸をかけたような感じの滝。ここらあたりの沢は、標高700mのあたりで落差20m程の滝をかけるだけだと思っていたので、ちょっともうけたような気分になる。ホールドが豊富なので、右岸を直登して越える。このあとさらに5分程遊ったところが二の沢(仮称)出合であった。本流の方の遊行は一時中断して二の沢(仮称)に入る。

二の沢(仮称)の遊行終了後、出合まで戻って本流の遊行再開。10分程遊るとホの沢(仮称)出合となる。ホの沢(仮称)は出合から50m程入り込んだ所に20mの滝をかける。本流の方もやはりホの沢(仮称)出合から50m程上流にこれまた20mの滝をかける。両方の滝とも直登不能。ここは措くしかない。2つの沢を分ける小尾根に取り付いたところ、この小尾根には踏跡があり、おかげで楽に高措くことができた。

本流の20m滝の上はやはりナメ。そのナメを50m程進むと、への沢(仮称)出合である。ここで本流遊行をまた中断して、への沢(仮称)に入る。

への沢(仮称)の遊行を終えると、再び出合まで戻って本流の遊行を続けるが、ここまでくると本流の方ももう狭い流れとなっている。そしてナメが終了。この先はもう細い流れとなって、随所に湿地が出てくる。どこで遊行終了にしようかと考えながら進んでいたら、ちょっと変わった地形が出てきた。沢が湿地帯の中をトンネルとなって流れているのである。規模は比較にならないが、尾瀬の竜宮カルストと全く同じである。湿原地帯ではともかく、沢の源流でこんな地形をみ

たのは、私は初めてである。

沢はますます細くなった。ここまできたら真名子川の水源を確かめてやろうとブッシュもかきわけ進む。10:05ようやく源頭。真名子川の水源は、湿地帯からしみ出る微量の水であった。(記)

[タイム] 遡行開始(6:45)→ニの沢出合(7:00, 8:30)→ホの沢出合(8:40, 9:15)
→への沢出合(9:20, 9:40)→遡行終了(10:05)→林道(10:10)

真名子川支流イの沢(仮称)中俣, 右俣, 左俣

1990年9月9日

9:10, イの沢(仮称)中俣めざして下降開始。10分程で小さな湿地に出る。ここから小沢の流れが始まった。流れについて下り始めるとすぐ4mの滝。倒木を使いながら左岸を下る。このあとしばらくは平凡となった。

やがてナメが出てくる。源流部の手前に長いナメというのは、このあたりの沢のパターンのようである。ナメを10分程下ると右俣出合。水量は中俣の5分の1程度で沢幅も貧弱であるが、沢床は右俣の方が低い。鉄分を多く含んだ水が流れている。右俣はしばらくナメが続く、その先はブッシュの中に消えていた。

右俣の偵察から戻って下降再開。すぐ3m程のナメ滝をクライミングダウン。そしてその先で左俣が合流するが、そのあとは足元が突然スッパリ切れ落ちて、15mの滝となっていた。やはりこの沢にも滝があった。

滝をどう下ろうかと思案する前に、左俣をつめてみることにする。左俣は沢床こそ中俣より高いが、水量は倍ほどある。出合の7mナメ滝は、フリクションをきかせて楽に登るが、帰りはクライミングダウンに少してこずった。この左俣もずっとナメが続く。そしてナメが切れた時には、沢はもう樹林帯の中の細いミゾでしかなくなっていた。

再び滝の上まで戻って下降ルートを探す。左岸から捲いて下ることにしたが、途中で岩場に行き当ってしまい、シュリング1本を残置して、ようやく下りおえる。滝の下流は平凡な河原となっていた。

しばらくノンビリ歩いていたら、再びナメ床となり、足元が切れて5mの滝となる。隣接する千歳川流域と同じようにこの真名子川流域も滝の下は平凡な河原が続くだけで、真名子川本流との出合まで何もないだろうと勝手に思い込んでいただけに、とても素敵なプレゼントをもらった気分となった。ところでこの滝は